＜様式 6-5 学校教育活動支援事業成果報告書＞

【研究主題】 地域の宝、北小っ子の夢や未来に向けた思いを表現しよう
【副題】 書写パフォーマンスで、地域に発信しよう

【学校名】 東近江市立愛東北小学校

１　本校の概要

本校は、湖東三山の一つ、百済寺の麓に広がる農村地帯に位置し、全校児童１０１名といった小規模校である。令和８年には、創立１５０周年を迎える歴史のある学校であり、地域に開かれた学校として地域の方に見守られ、地域の方に育まれる中で、学校教育活動を行っている。

そうした中で、地域の課題は、児童数が年々減少していることであり、令和４年にはこの地区一帯が過疎地域に指定された。今、子どもたちは、地域の未来を担う存在であり、地域の希望でもある。今年度、「愛東北小学校同窓会」は、会員の思いを反映し、「愛東北小学校未来育成会」に名称が変更された。今、地域の方々の熱い思いが、学校や子どもたちに注がれている。

本校の教育目標は、『頭・心・体』みがきかがやく北小っ子」である。未来を切り拓く子どもたちの育成をめざし、日々、学習や生活の場で、「主体的・対話的で深い学び」を意識し、子どもたちにより確かな力を付けることを念頭に教育活動を行っている。その中でも、児童の「主体性」を育むことや自分の思いや考えを表現する力を付けることについては、特に大事にしており、学校全体で子どもたちの前に向かう意欲や思いを創り出し、自己と向き合い、思いを表現する場を設ける必要があると考える。

本校の子どもたちは、よき伝統を受け継ぎながら学校生活を送っている。その一つとして、１年生から６年生が所属する「はとのこ班」での活動がある。６年生を中心とした縦割り活動で、遊びや掃除、イベントなどを行う中で、６年生が最上級生として集団をまとめている。班員一人一人がその学年に応じた役割を果たし伝統を受け継いでいる。５年生は、６年生の姿を目標とし、様々な取組が伝統として続いている。

今回、６年生が、卒業に向けての思いや願いを表現する取組を通して、北小っ子の夢や未来に向けた思いを表現し、前を向いて進もうとする力強い姿を、全校児童、保護者、地域の方に示すことはできないだろうか、新たな伝統として築けないだろうかという思いから研究が始まった。

本校では、普段から毛筆指導を通して児童の『思いを表現すること』を大切にしているが、卒業を前に、書道パフォーマンスをイメージした毛筆の作品作りを通して、子どもたちが卒業に向けて思いや願いを語り合い、書にしてその思いを表現し、地域の方へ発信することができないだろうかと考えた。

２　取り組んだ内容

（１）自分の思いを書き表す毛筆指導

①普段の毛筆学習では

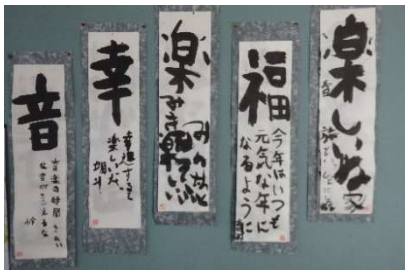
児童は書写の毛筆学習をとても楽しみにしている。勿論、毎回の学習にはねらいがあり、めあてを意識して、作品作りを行っている。

基本、子どもたちの字を否定せず、作品に一人一人の個性を見つけた上で、それを言葉にして褒める指導を行っている。教科としての基礎・基本である「筆を立てて」「バネを意識して」「にじみやかすれを活かして」など「毛筆のいろは」を積み重ねることで習得していくが、基本的にはお手本無しで、文字のイメージを大事に自由に表現する。ただし、自由に書くには、実は知識や技術が必要で、筆の使い方や半紙の置き方、紙を押さえる手の置き方などの基本的な指導が大事になる。

また、自分の思いや考えを書で表現するには語彙力が必要になる。書く行為を楽しむことは「手段」であり、自分で考えて工夫する力を養うことが「目的」であ

ることを念頭に置く必要がある。

このように、３年生以上の毛筆指導の中で、「自分らしく」「自分の思いを表現する」ことを大切に充実を図り、書くことを通して自分自身を知っていく。教師は、一人一人に、働きかけ、その内面に向き合い、自己表現力や自己肯定感といった目に見えづらい「認知力」を育むことを大切に、毛筆指導を行っている。



② 様々な表現に親しむ

季節に合わせて、あるいは生活や活動のシーンの中に、毛筆を取り入れて書く活動にも取り組んでいる。

秋には、「スズムシ」や「どんぐりころころ」など秋を感じられる歌、冬には「お正月」「ジングルベル」など冬を楽しむ歌を書き、作品づくりを楽しんだ。

字のもつ意味や願いを理解し、字体や構成、中には挿絵も描きつつ、自分の思いを効果的に表現することを楽しんだ。字をバラバラに捉えるのではなく、リズムやまとまりを意識して書くことで、一体化した、見応えのある作品に仕上がった。表現する楽しさが見る人に伝わった。

年末年始には、画仙紙を用いて、「書き初め」を楽しんだ。その子自身の字の解釈が作品に表れており、生き生きとした活動となった。

（２）職員から児童へメッセージを贈る

夏季休業中に、校内研修として書写の実技講習を行った。６年生の卒業における書写パフォーマンスを念頭におき、職員で教材研究を兼ねて大筆を用いて書を書いた。一つには、普段用いている筆の何倍もの大きさの筆で書くために指導法を学ぶこと、もう一つは、共同作品をつくる際に、いかに一つの作品の中に全員の思いや願いを込め書き表していくかを検証することを目的とした。その中で、一人一人が自分と対話し、思いや願いを文字にすること、自分の思いを伝え合い対話を重ねる中で全員で「一つの文字」を決定すること、すなわち「主体的・対話的で深い学び」により表現活動を行うことが大切であることが見えてきた。

① 文字を決める

２学期始業式に伝えたい「先生達からのメッセージ」となる「一字」を職員に募集した。文字は、全職員で一文字を１画ずつリレーして書く共同作品とするため、職員の人数である１３画以上の画数のある文字であることを条件とした。文字に込めた思いや願いについて書いてもらい募集した。集まった文字を示し、全職員の投票により文字を選定した。

選ばれた文字は一番票の多かった「輝」で、そこに込められた願いは、「子どもたち一人一人が、命輝く、笑顔輝く２学期となるように」というものだった。

② 大きな紙を作る

模造紙（全紙）を６枚分貼り合わせ、体育館に掲示しても見応えのあるサイズの大きな紙を作った。

③ 大きな筆で書く

大きな筆をバトンにして、一人一画ずつ書いた。次の順番の人が、墨バケツをもち、筆の墨がこぼれないようにサポートした。

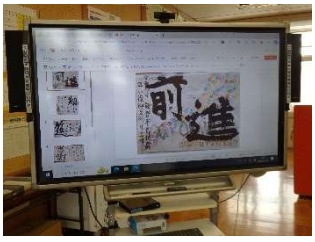
④ 児童にメッセージを贈る

始業式の「校長先生の話」の中で、大きな紙に書いた大きな文字を披露し、文字に込めた教師の思いを紹介した。書を見た子どもたちの反応は大きく、全校の子どもたちに大きなインパクトでメッセージが伝わったと感じた。また、学校だよりにも、職員一同で書いた「輝」を囲んだ写真を掲載した。学校だよりは、保護者や地域の方の目にも触れる機会が多く、たくさんの方から感想が聞こえてきた。改めて、書のもつメッセージ力の高さを感じた。また、子どもたちにとって、大きな紙に書かれた「大きな書」に出会う機会となり、大筆で表現することへの期待や興味をもつ機会となった。

（3）卒業生１３人の共同作業

卒業に向けての思いを大筆で書く

① 「大書き」で書く文字について話し合う



導入で書道パフォーマンスの画像を見せ、大きな紙に、自分たちの卒業に際しての夢や未来に向けた思いや願いを表現しようと伝えた。今まで自分たちを「地域の宝」として支えてくださった地域の方へ感謝の思いを込めて、小学校を巣立つ覚悟、夢などを言葉にして発信すること、１３人で共同作業を行い、愛東北小学校の新たな伝統を築いて欲しいと伝えた。

語彙力が試される中で、タブレットで検索しながら自分の思いに向き合い「挑戦」「喜び」「感謝」などの言葉を考えた。その中で、子どもたちが選んだのは「可能性」という言葉だった。文字に込めた思いを伝え合うことで、お互いの卒業に向けての思いや願いを知り共感的に思いを伝え合い相互理解につながった。選ばれた文字も選ばれなかった文字も、「宝物」であることを確認した。共同で描くことに決まった「可能性」という言葉に対し、「自分の可能性を信じてがんばる」「可能性が無限大」「可能性のかたまり」といったイメージがあることについても共有した。

② 書く順番や工夫を考える

「可能性」という３文字を描くこととなり、２３画を１３人と先生で書く順番を決めた。

また「可能性」という言葉に乗せた一人一人の思いを小書きで自分の名前と共に書くことにした。また、無限大を表す「∞」を春色にちなんだピンクで下地として描くなど制作の計画を立てた。

③ 大きな紙をつくる

のりで貼り合わせ大きな紙をつくり、「∞」を描いた。

④ 大筆の書き方を学ぶ

いよいよ大筆に墨を付けいかに書くかスキルを学ぶ場面となり、子どもたちの興味は高まった。身を乗り出し目を輝かせて筆に墨が入る様子を見つめる姿が見られた。筆の握り方、筆先の立て方、線の引き方など筆の扱いについて学ぶ中で、そこで生まれる「にじみ」や「かすれ」の面白さから「書きたい」という気持ちが高まる場面となった。

⑤　１３人の共同作品を大きな紙に書く

１画目から順に筆をバトンに作品を書き進めた。筆で書く児童と次の児童がバケツを持ち、役割を果たしながら書き進めていく。一筆一筆に個性が表れ、その一筆書く度に歓声が沸き起こり、仲間から拍手が贈られた。完成した時、全員の思いが形になった瞬間で感動があった。紙面を上手く活かし合い、伸びやかで力強い仕上がりとなった。児童の「チームとしての肯定感」が大いに感じられた。

⑥　小書きで自分の思いを書く

「今の自分をこえる」「勉強や習い事をがんばる」「ありがとうを伝える」「可能性を信じて挑戦しつづける」など児童は、自分の思いを小書きで書き、名前を書き加えて完成した。

３　活動の成果

子どもたちが「卒業を目の前にして、願いや思いを形にすること」に対し、テーマの意義や書くことに対する必然性は十分にあったと考える。１３人でつくる作品づくりは最後の共同作業であり、よりよいもの、より自分達の思いを表すものをつくりたい表したいという主体が感じられた。作品を仕上げる中で、進んで紙づくりを行ったり、役割や順番を決めたり、作品をよりよくする工夫や追求が生まれ、作品作りの中で学びを深める姿が見られたことが大きな成果である。自分の思いを書にして伝える喜び、表現する力を高め、

卒業に向けて、主体的な姿を創り出すことにつながった。また、共同で大筆で書く経験を通して書のもつ可能性に気づき、作品作りの楽しさを感じることができた。こうした取組が伝統として続くことを期待したい。

また、卒業記念に書いた卒業の書を、卒業式に掲示し保護者や地域の方に見ていただく機会とすることとなった。また、卒業記念として、地域の方が頻繁に訪れる校区内にあるスーパーで掲示してもらえることになった。これは地域の方からの積極的な働きかけにより実現した。

地域にとって児童一人一人は宝である。卒業を前に、夢や未来に向けて、前を向いて進もうとする児童の思いを地域の方に発信することに意義を感じつつ、今後、伝統となり、地域の方に感謝の思いとともに子どもたちの思いが届くとよいと感じる。